

## アルゼンチンの交換クラブの変遷に関するメモ

泉 留維 (いずみ・るい)

アルゼンチンでは、市民と地方政府それぞれが連邦政府とは全く関係なく、独自に「貨幣」を発行し、危機的な経済状況を自らの手で克服しようとしてきた。市民の取り組みは、交換クラブまたは RGT と呼ばれている。交換クラブは、通貨危機による経済の低迷を背景にし、NPO である PAR (地域自給プログラム) が 1995 年に始めた。本稿では、この交換クラブのこれまでの変遷について紹介し、簡単なながらもその破綻の要因を考察する。

そもそも各国で中央銀行が設立されて以降、一国一通貨という概念が普及し、そのような状況が当たり前のようになっていった。さらに 20 世紀後半を過ぎると複数国という広域で通貨を統一しようと言う動きがヨーロッパで現れ、その結果ドルに対抗するユーロの誕生に至っている。だが、世界中をよく観察すれば、一国一通貨ではなく一国複数通貨と言うべき状態の国を見つけることができる。その一つの例が、今回取り上げるアルゼンチンであるが、想像するよりもその使い勝手はそれほど悪いものではない。域外との経済活動を考えれば、単一通貨の方が優れているかもしれないが、経済とはそれだけではないのである。

複数通貨を生活の中で使用することは、アルゼンチンでは、交換クラブ設立以前から一部ですでに始まっていた。それは、州政府が発行する債券が貨幣的、すなわち準通貨として流通していたからである。1984 年にサルタ州で公務員の給料支払いなどの目的のために発行されたのを最初に、徐々に全国に広まっていったのであった。

交換クラブは、PAR が一応中心組織として存在するが、基本的にはノードと呼ばれる各地のグループをつなぎ合わせた緩やかなネットワーク組織である。交換クラブ内で使用される紙券はクレジットと呼ばれ、1 クレジットは 1 ペソに対応しているが、ペソとクレジットの交換はできない。また原則的に、クラブ内でのあらゆる取引は、ペソを使用せず、クレジットだけで行われることになっている。数回の講習会を受講した後、新規に各地にあるノードに加入すると、50 クレジット分の紙券が渡される。この紙券には様々な種類があり、加入したノードでしか使用できない紙券、いくつかのノードからなる区域で使用できる紙券、全国のノードで使用できる紙券 (PAR 発行) などがある。このクレジットで、家庭での基本的な修理サービスから始まり、農産物までありとあらゆるものを購入することができる。そして主にクレジットが用いられるのは、ほぼ週 1 回のペースで各ノードで開かれるフリーマーケットである。その規模は様々で、2001 年 3 月にブエノスアイレス市レコレタ地区で行われたフリーマーケットでは、3 万名もの人々が参加したと報道されている。

このアルゼンチンの交換クラブは、6 段階にわたる変化を経験した。

1995 年 5 月 ~ 96 年 9 月: ノードの数も非常に少なく、仕組みも様々で統一されていなか

った。

1996年10月～97年4月：転々流々する債券、「クレジット」と呼ばれる紙券を発行する方式が増加。主に首都圏で進捗していく。参加者は1万人を超える。

1997年5月～99年6月：ブエノスアイレス州内でいくつかのノードが集合した区域が設定され、区域単位での管理運営が始まり、また地方でも組織が立ち上がり始める。参加者は10万人を超え、紙券の総発行量は170万クレジットにのぼる。

1999年7月～00年12月：数万人規模のフリーマーケットが開催され、経済省中小企業局が交換クラブを利用したベンチャー企業立ち上げ支援を始める。紙券の総発行量は450万クレジットにのぼる。

2001年1月～02年4月：急激に参加者が増え、全体での発行管理が行えなくなり、管理不能に陥るノードが出てくる。一方で、巨大なフリーマーケットが頻繁に開催される。

2002年5月～02年12月：参加者は600万人を超えたが、紙券の過剰発行、偽造の横行、紙券の割引販売など様々な問題が発生し、システムが崩壊へと向かい始める。

わずか23人から始まったこの取り組みは、アルゼンチン経済の低迷と共に急速に発展し、最盛期には1万近いノード、そして約2,000種類の紙券が発行され、600万人以上もの参加者がいた。交換クラブの研究者であり活動家であるエロイサ・プリマヴェーラによれば、02年の交換クラブでの取引高は推定30億ドルにもものぼったそうである。だが、第6段階以降である2002年末から03年にかけてこの急成長が裏目に出て、ほとんどのノードが破綻に追い込まれた。

破綻に至った要因は複数考えられるが、まずシステム的な問題から行けば、2002年の半ばにかけて、各ノードにおいて全国で使用できたPAR発行のクレジットの独占的な採用が進み、この中心性への移行が、各地域で構築してきた社会的ネットワーク・紐帯を傷つけてしまったことがある。上記にもふれたが、大量の偽造クレジットの流通やクレジットのペソでの割引販売が横行し、また紙券の発行は新規加入者へ50クレジットのみという原則が守られず、基準を設けなく勝手にPARが大量にクレジットを発行したことも要因としてあげられる。さらに、交換クラブの参加者が増えるにつれ、彼らはその管理運営にほぼ携わることなく、単に日々交換する場としてだけ捉えるようになったことが、意識面で大きな問題を生じさせたと思われる。一般的な生産物とは異なる貨幣が、その発行がどのような水準であるかは別にしてコミュニティの規律・規範を受けることを失念したのであろう。交換クラブが発行する紙券は、社会改革としてのお金ではなく、単なる低所得者向けのペソの代替物にしか認識されなく、結局、有効な対策を打てず危機が表面化して1年強で破綻してしまった。

2003年10月25日